

現場へ!

「毎回300人以上が集う子ども食堂がある」。取材先でその耳にして心が動き、10月下旬、山口県宇部市の現場に向かった。訪ねたのは、市内の西法寺で月2回、夕食を提供する「みんなの食堂」。子どもだけでなく大人も無料だ。夕方になると、寺の駐車場に車が続々とやってくる。食堂となる広間の入り口には、開催を待つ長蛇の列ができていた。

午後5時にオープン。広間はすぐに子連れの家族らで埋まり、きのこカレーと酢の物、野菜サラダなどの夕食が配られた。幼い息子2人を連れてマイカーを20分運転してきたという母親(36)は「ママ友に会えるし、イベントもあって子どもも楽しめる。いつも来ています」と笑顔を見せた。仕事帰りに立ち寄った女性(62)は一人暮らしとしい、「1人の食事は味気ない。ここで食べると、ほんわかした気分になれる」と話した。

広間の隣の本堂では餅つきも始まった。子どもたちは餅つき体験に歓声を上げ、出来たての餅をほおぼって楽しい時間を過ごした。午後7時までの2時間で、乳幼児からお年寄りまで393人が来訪。調理や配膳を担当するボランティアも大学生や高校生、看護師や保育士など約30人に上った。

みんなの食堂は、小児科医の金子淳子(55)と西法寺住職の斉藤淳理(51)らが発起人となり、201



子ども食堂 ブームを超えて④

大人も歓迎 300人集う寺

7年7月に始めた。子どもを中心に多世代が交流する場づくりを目指している。開催のたびに食材やお金の寄付をしてくれる個人や企業が増え、金子は「子どものために何かすれば、本当にたくさんの方が共鳴してくれ、ことに気づかされた」と言う。金子は小児科医として様々な境遇の子どもに接してきたが、救うことができず、はがゆい思いをしてきた。それだけに子ども食堂にかける思いは強い。「誰でも来られるこの場を通じて、一人でも多くの子どもが健やかに育つ手助けをしたい。そして大人になったら支援者として戻ってきてほしい」。寺の行事に人が集まらないことに悩んでいた斉藤は「来てくれるだけでありがたい。お寺を身近に感じる契機になれば」と話す。

子ども食堂は、東日本大震災の被災地にも広がっている。震災を機に設立されたNPO法人「アスイク」(仙台市)は、避難所や仮設住宅で暮らす子どもへの学習支援をへて、いまは子どもを幅広く支援。その一つが子ども食堂で、宮城県多賀城市で16年から1カ所運営するほか、県の子どもの食堂の立ち上げ支援事業にも事務局として携わっている。

代表理事の大橋雄介(39)によると、県内には10月末現在で97カ所の子どもの食堂があり、被災した沿岸部で活動してきたNPOが運営を手がけるケースが目立つ。背景には、震災からまだ立ち直れない家庭の存在もあるという。

大橋は「震災後に活動してきたNPOだからこそ、見えてくる課題もある。子ども食堂などを通じて、幼少期から大人まで切れ目なく関わる体制をつくりたい」と話している。

敬称略
(清水康志)

④幅広い世代の参加者でにぎわう「みんなの食堂」⑤発起人となった小児科医の金子淳子(右から2人目)や住職の斉藤淳理(左端)ら=いずれも山口県宇部市



NPO法人「アスイク」代表理事の大橋雄介=仙台市宮城野区